



# HOKKAIDO UNIVERSITY

|                  |                                                                                   |
|------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | マクベス及びマクベス夫人の性格について : 「マクベス」の近代性                                                  |
| Author(s)        | 柏倉, 俊三                                                                            |
| Citation         | 北海道大學文學部紀要, 1, 119-135                                                            |
| Issue Date       | 1952                                                                              |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/33112">https://hdl.handle.net/2115/33112</a> |
| Type             | departmental bulletin paper                                                       |
| File Information | 1_P119-135.pdf                                                                    |



マクベス及びマクベス夫人の性格について

——「マクベス」の近代性——

柏  
倉  
俊  
三

## マクベス及びマクベス夫人

### の性格について

——「マクベス」の近代性——

柏 倉 俊 三

Fair is foul, and foul is fair.

Hover through the fog and filthy air.

### は し が き

世にいふシェイクスピアの四大悲劇「ハムレット」(Hamlet)、「オセロー」(Othello)、「マクベス」(Macbeth)、「リア王」(King Lear)はみなそれぞれに異つた特色をもつてゐて、これらがみな同一作家の手になつたことについては、何人も驚嘆の聲を放つてゐる。そして彼の劇は所謂ローマン劇であつて、その形からいへば、「テンペスト」(Tempest)のやうな例外もないではないが、大體に於て、ギリシア劇などとは遠いところにあると考へられてゐるが、その中でも、「マクベス」は最もギリシア的であるといはれてゐる。それは、運命を恐れない人間の傲慢さとそれに對する懲罰とを一應の主題にして居るようにも見え、その取扱ひ方が單純、率直、簡明であり、従つてその進行が奔湍の如く滔々と流れて澁滞がないからである。つまりその外部的な姿の故を以てなのである。とにかくこの劇では、驚くべき造型性が發揮されてゐる。すべてがはつきりと刻み出され、裁斷まことに鮮やかであつて、カットグラスの巨大な器を見る感じである。でなければ、青空にくつきりと綾線を劃してゐる白皚々の水晶山を仰ぐ感じであるといつてもよい。しかしそれはその内容が單純であり、淺薄であるからではない。いや、事實はその反

對のものなのである。開幕第一場で、ウィッチ(妖巫)どもが、

Fair is foul, and foul is fair.

(清美は醜穢、醜穢は清美。)

と、歌つてゐるやうに、その内容は矛盾撞着であり、複雑であり、暗黒であり、謎なのであり、混沌なのである。深淵のやうに深く凄愴、その底にはいろ／＼複雑なものを藏してゐるのである。ただ彼の手腕が、これを簡潔鮮明に處理してゐるといふだけのことである。ソフォクレス(Sophocles)の「オイデポス王」(Oedipus the King)が、神託によらば、「母と縁を結び、光の下に人に厭はれる一族を生み父を殺すであらう」と、いはれた自らの運命を逃れんがために、逃亡し、そのために、却つてこの運命の油地獄へ眞倒にとび込んで終つてしまふことを考へながらマクベスが妖巫どもに豫言された最後の運命から逃れようと藻掻き苦悶しながらも、結局その豫言通りの最期を遂げるのを見ると、如何にもギリシア的な運命悲劇のやうにも思はれる。けれども、まづ第一に兩者の主人公の性格からしても随分違つてゐる。前者は「あゝすべてのことは明らかになつてきた。光よ。俺はこれより後おまへを見まい。……」と言つて、自らその兩眼をえぐり出した人物であり、それに比べてはマクベスの弱い、しかも剛腹な、矛盾の多い、複雑な、所謂近代的な性格とは、はじめから違つてゐる。そこで、しかく簡單に處理することはゆるされない。その照明のむけ方で、いろいろの面が出てくるのである。よくいはれるやうに、野心の悲劇とか、良心の悲劇とかいふようなただ一つの言葉では、どうしても蔽ひ切れないものを持つてゐる。人間性の問題、心理の微妙な動き、意志の強弱、野心、良心、恐怖、悔恨、運命とか超自然的な問題など、またそれら相互の關係などと、挙げ切れないほどの問題を滿載したトラックのやうに、「マクベス」は、すばらしい斷崖の棧道をば、ときどき深い奔湍をのぞきながら、急ピッチで走るのである。そしてそれらの問題は、場合によつては具體的な姿を、またある

時は象徴の姿をとつてゐるのである。それで、ここでは、主人公マクベスの性格を主とし、それに附随してマクベス夫人のそれに觸れてみたいと思ふ。

- (1) シェイクスピアの戯曲は古典劇の三一致の法則を無視したものであるが、この「テンペスト」は例外を見せてゐるのである。
- (2) その一例をあげれば、クイラー・クーチ (Sir Arthur Quiller-Couch) などであつて、彼は、「そのプロットの強度の簡潔さ、舞台やその補助人物の動きの流暢なさ、用意周到な天の手によつて仕組まれた操人形となつてゐる代理者の繰りひろげる應報などから考へて、シェイクスピアの作品中比類ないまでギリシヤ悲劇に似てゐる。してまた期せずしてギリシヤ悲劇作家——例へばソフォクレス——の喜んだアイロニーを満々と流れてゐる」といふ「なす」とも極言してゐる。(cf. Sir Arthur Quiller-Couch: *Shakespeare's Workmanship*, chap. III)
- (3) Sophocles: Oedipus the King. 王の告白の一節であつて、村松正俊氏譯による。
- (4) 同上
- (5) 例へばキャンベルは、『通常「マクベス」をば野心の悲劇と云つてゐる……』と述べてゐる。(cf. L. B. Campbell: *Shakespeare's Tragic Hero*, Chap. XV, *Macbeth: A Study in Fear*, p. 208)
- (6) 例へば、シュッキングは「……この理由で、多くの批評家は、その良心に反して實行しなければならなかつた苦悶につづいて述べてゐる。云々」と述べてゐる。(cf. Levin L. Schücking: *Character Problem in Shakespeare's Plays*, chap. II, p. 71)
- (7) 例へば、ウイリソン・ナイトは、『「マクベス」はシェイクスピアの描く惡のヴィジョンの最も深刻且つ完璧なものである。』(cf. G. Wilson Knight: *The Wheel of Fire*, chap. VIII, *Macbeth and the Metaphysic of Evil*, p. 154) と云ひ、またソマゼイルは、『シェイクスピアのすべての狂氣的性格中マクベスは、その分析が最も困難である』(cf. H. Somerville: *Madness in Shakespearean Tragedy*, chap. II, *Macbeth: A Paranoia*, p. 41) と云つてゐる。

# 一

悲劇「マクベス」は、一口に云へば、弑逆の初中後を示した芝居であ

る。そして彼マクベスは、一應は榮達を願ふ野心家であり、やや意志力、決斷力の弱い、迷信家風の人物でもあり、武人ではあるが、想像力に富む詩人肌の人物になつてゐる。弑逆の後には、道德的反省や良心の苦悶といふよりは、むしろ發覺の不安におびえ、破局の招來を恐れて、自暴自棄的な猪突に墜るのだと、一應はいへる。とにかく彼の性格はこの戯曲に表はれる限りに於ては、つぎつぎに變貌してゆく。まづ二人の妖巫の豫言に誘惑される以前のマクベスとそれ以後の彼との間には、相當の差異が見られる。そして彼の陰謀がすすむにつれて、マクベスの善良であつた性格は次第に消え去り、惡逆無道の邪念が、彼の心の中にひろがつてゆくのである。

ところが、マクベス夫人になると、シェイクスピアの描いた數多の女性の中でも、屈指の意志強烈な、野心の前には何ものをも犠牲にして顧みない、極めて強い女性として描かれてゐる。が、しかし、決して恐しい夜叉のやうに描かれてはゐない。愛想のよい辭禮に巧みな社交婦人であり、野心の前には女夜叉のやうになつて、尻込みする夫を勵ますけれども、なほその際でも決して女らしさを失つてはゐない。言葉をかへれば、あらゆる女らしさをば、むしろ夫をして殘虐を行はしめるために百パーセント活用してゐるといへる。しかし、この強烈な性格にも弑逆を契機として、一つの大きな變化が見られる。即ちそこに一つの破綻が起つたからである。それは、本望成就のための氣のゆるみかも知れないし、また意力を支持する體力そのものの衰弱から起る兩者間の均衡の破綻かも知れない。

まづ、マクベスの勇猛果敢なことについては、開幕のはじめに於て、叛將マクドードナルド及びノーウェー王スウィーノーとの戰爭に於て、彼の働きぶりを、負傷流血の士官が、ダンカン王に報告して、

For brave Macbeth (well he deserves that name),  
Disdaining fortune, with his brandish'd steel,

Which smoked with bloody execution,

Like valour's minion, carv'd out his passage,

Till he fac'd the slave. (*Macbeth*, act I, Sc. II)

(その名に恥ぢぬ猛將軍のマクベスとの、運命には目をくれず、武勇そのものの秘藏子でもあるように、血煙立つたる大太刀を揮り閃かし、驀地に敵中に割つて入り、遂に賊將めに邂逅はれました。)

と、申して居り、また同じく戦場から来た一貴族マクベスは、「いくさ神ベローナ女神の御婿君」(同じく第一幕第二場)として、彼の武勇を推稱してゐる。しかし、彼はただがむしやに強だけの武辨ではない。彼自らも、

I dare do all that may become a man ;

Who dares do more, is none. (*Macbeth*, act I, Sc. VII)

(人間の(男子)のすべきことなら、何でもやるが、それ以外をするのは人間じやない。)

と、いつてゐるやうに、ものの條理をつくし、是非を辨へてゐる。ここから、ある場合には性格の脆さが生れてくる。そこでマクベス夫人は、この大逆遂行について、彼の性格に對する危惧を述べて、

—yet do I fear thy nature ;

It is too full o' the milk of human kindness

To catch the nearest way : thou wouldst be great ;

Art not without ambition, but without

The illness should attend it : (*Macbeth*, Act I, Sc. V)

(けれどもあなたの氣質が心配になる。手取早くやつてのけるには、甘過ぎる、柔和しすぎる。偉い人にならうといふ希望もあるし、大望もないではないけれども、それを遂げには、是非ともなくちやならん横道な心がない……)

と、いつてゐるくらゐである。しかし、このやうな心を持つてゐたマク

ベスも、その夫人がちゃんと見抜いてゐたやうに、

…… : what thou wouldst highly,

That wouldst thou holily ; wouldst not play false,

And yet wouldst wrongly win : (*Macbeth*, Act I, Sc. V)

(無上に欲しがつてゐながら、不淨な手段は用いまいとなさる。不義を行ふのをいやがつてゐながら、不正な望みを抱いておいでだ。)

と、いふやうな矛盾を包んだ心なのであつた。そしていま彼は凱旋の得意に、心大いに驕つてゐる。自らはつきりした意識にのぼらないまでも心のどこかに、もしも王位といふものに即けるものならといふやうな氣持のかげが、ちらりと動かないとはいへない。この意識にものぼらない意識、つまり潜在意識を揺すぶつたのが、即ち妖巫ともであつた。勿論當時の人々には妖巫なるものは實在であつた。現代人にはさうした實在性がなくなつてゐるといふならば、これは一種の象徴であるといへる。これはマクベスの内心に萌した潜在意識を作者が外部にとり出して見せた具體的な姿であると考へれば、それでもよい。かくして彼の心はこれまでになく動搖して、うららかな心の世界にも暗雲低迷して、

So foul and fair a day I have not seen. (*Macbeth*, Act I, Sc. III)

(こんな穢るしい清らかな日は、曾て見たことがない。)

と、いはざるを得なくなつたのであつて、これは、妖巫の「清美は醜穢。醜穢は清美。」なる言葉によく照應し、表裏一體をなし、やがてこの芝居は暗黒の支配するところとなつてくる。事實全篇五幕二十八場のうち、はれやかな場面は二つか三つにすぎない。かくして凱旋の途上に彼を迎へた三人の妖巫が、それぞれ、

*First Witch.* All hail, Macbeth ! hail to thee, thane of Glamis !

*Sec. Witch.* All hail, Macbeth ! hail to thee, thane of Cawdor !

*Third Witch.* All hail, Macbeth, that shalt be king hereafter !

(Act I, Sc. III)

(第一妖巫、万歳、マクベスどの！ 万歳、グラームスの御領主！

第二妖巫、万歳、マクベスどの！ 万歳、コーダーの御領主！

第三妖巫、万歳、マクベスどの！ ゆくゆくは國王さまともならつ

しやるマクベスどの！)

と、いふのを聞いたとき、彼ははしなくも自分の心に觸れられて、愕然たる驚きを顔色にあらはしてしまふので、傍のバンコウは、

Good sir, why do you start ; and seem to fear

Things that do sound so fair ? (*Macbeth*, Act I, Sc. III)

(何故貴下はびひくりするのです。大變に目出度い豫言ぢやありませんか？)

といつて、彼の心をしづめてくれるので、彼はようやくわれにかへつて眞剣に、

But how of Cawdor ? the thane of Cawdor lives,

A prosperous gentleman ;…… (*Macbeth*, Act I, Sc. III)

(コーダーとは何だ？ コーダーの領主は、まだ生きてゐて、榮えてゐる……)

と、妖巫に詰め寄つたが、しかしその時には、彼女らはもう空氣の中にその姿をかくしてしまつてゐた。やがてやつて來た貴族のロスが傳へる王のお言葉によつて、彼がコーダーの領主となることがわかつて、妖巫らの豫言の一部は忽ちのうちに實現してしまふ。かくして彼には野心の影がひろがつて

Glamis, and thane of Cawdor !

The greatest is behind. (*Macbeth*, Act I, Sc. III)

(グラームスとコーダーと！ 一番大きなのが残つてゐる。……)

と傍白するし、また、つづらて

Two truths are told,

As happy prologues to the swelling act

Of the imperial theme.—— (*Macbeth*, Act I, Sc. III)

(二つは的中つた。王國を主題とした雄大な劇の開場詞としては幸先がよい。)

とも傍白するようになり、かくして次第に野望の深淵に落ち込んだかの如く見えるけれども、

If good, why do I yield to that suggestion

'Whose horrid image doth unfix my hair

And make my seated heart knock at my ribs,

Against the use of Nature ? Present fears

Are less than horrible imaginings :

My thought, whose murder yet is but fantastical,

Shakes so my single state of man that function

Is smother'd in surmise, and nothing is

But what is not.

(*Macbeth*, Act I, Sc. III)

(善い事なら、なぜこんな誘惑が萌して、怖い幻影が目に見えるか？ それを想像すると、身の毛がよだつて、例になく、心臓が、肋骨へぶつつかるやうに、鼓動する。現在の怖しさは想像の怖しさほどではない。今は只弑逆を空想してゐるだけなのだが、そのためにわが心の王國は擾亂して、種々の臆測に統一は破れ、思慮は窒息し、只空な幻影ばかりが目に見える。)

と、告白する。かくして彼の氣の弱さは優柔不斷となつて表はれ、彼の氣持の動搖が、王位を奪はうとする彼の野望と争ふのである。そして時によ、

If chance will have me king,

Why, chance may crown me,

Without my stir. (*Macbeth*, Act I, Sc. III)

(運で王になるのなら、手を下さなくとも、運でなれやうなものだ。)

とも傍白する。彼の心はこの二つの焦點の間を浮動來往し、彼の性格の弱さは彼の果斷をゆるぎない。

(1) 今から見れば滑稽な迷信ではあらうが、亡霊 (ghost) 精霊 (spirit) 妖精 (fairy) 妖巫 (witch) 惡魔 (devil) の類の實在は當時一般に信ぜられたことで、シェイクスピアの作品中に散在するさうした超自然的要素は、當時の實際を示すものであり、例へばそれに觸れた學者はウィルソン (cf. J. D. Wilson: *Life in Shakespeare's England*, chap. II) などでは「ghost-play」の枚舉に違がなう。またその當時では有名なベネリタンのプリン (William Pryme) が、*Historia-Masix* の中で「エリザベス女王の時代にセントサンプソン劇場で、冒瀆にもフラスコ劇を演じていると(俳優も観客もともに大いに驚いたが)舞台上に惡魔が誰の目にも映つて登場した」と誌してゐる。

## 二

すでに述べた通り、烈々たる野望を包んだ、意志の強い、而もその野心斷行の前には何ものにもたぢろがない強く烈しい性格を持つてゐるマクベス夫人は、このとき、夫マクベスよりの手紙を読んで、その野望の實現を期して、彼を待ちうけながら、つぎのやうにいふ。

..... Hie thee hither,

That I may pour my spirits in thine ear ;

And chasise with the valour of my tongue

All that impedes thee from the golden round,

Which fate and metaphysical aid doth seem

To have thee crown'd withal. (*Macbeth*, Act I, Sc. V)

(さ……さ早く、ここへおいでなさい。わたしの精神を貴郎の耳の中へ注ぎ込むから、さうして、運命や不思議な援助が貴郎に授けようとしてゐる黄金の冠の邪魔になるものを、この舌の力で、叱りとばしてやるから。)

かくして早くも夫の性格の弱さを抑へようとし、また自らをも勵まして

..... Come, you spirits

That tend on mortal thoughts, unsex me here,  
And fill me from the crown to the toe top-full

Of direst cruelty ? make thick my blood ;

Stop up the access and passage to remorse,

That no compunctious visitings of nature

Shake my fell purpose, nor keep peace between,

The effect and it ! Come to my woman's breasts,

And take my milk for gall, you murdering ministers,

Wherever in your sightless substances

You wait on nature's mischief ! Come, thick night,

And pall thee in the dunest smoke of hell,

That my keen knife see not the wound it makes,

Nor heaven peep through the blanket of the dark,

To cry 'Hold, hold !' (*Macbeth*, Act I, Sc. V)

(さアさ、怖しい企事を介添する精霊どもよ、早く来て予を女でなくしてくれ、頭から足の爪先まで、酷い、殘忍な心で、充溢にしてくれ！予の血をこごらせてくれ、憫む心なんか働いて、醜い企をぐらつかせたり、實行の邪魔をしたりさせないために！さア、この女の胸に入つて来てくれ、やい、人殺を職にする精霊どもよ、この甘ったるい乳を苦い膽汁に變ちまつてくれ、目に見えない姿をして、人間の惡事を手傳ふ汝ら、いま、どこにゐるか知らないが！さア、眞暗な夜よ、汝も来て、黒闇地獄の黒煙で、押包んでしまつてくれ、予の鋭い劍に己が切る創口を見せないために、天が幕越しに隙見をして、「待て、待て！」と呼ぶやうなことのないために。)

と、自らを叱咤する。洵に壯なるものである。かくしてマクベス夫人は恰も意氣地ないわが兒を勵ますやうにして、夫マクベスに、ダンカン王の殺害をすすめるのである。さらに、

..... Bear welcome in your eye,

your hand, your tongue : look like the innocent flower,  
But be the serpent under't. He that's coming  
Must be provided for : and you shall put  
This night's great business into my dispatch ;  
Which shall to all our nights and days to come  
Give solely sovereign sway and masterdom.

(*Macbeth*, Act I, Sc. V)

(目にも、手にも、耳にも歓迎の意を示して、罪のない草花と見せかけて、その蔭の蝮になつてゐなくちゃいけません。さ、来る人の待受けをせねやりますまい。今夜の大切な仕事は万事わたしにお任せなさいまし、未來永遠に無上の權力を得ると得ないとは、それで決るんですから。)

と、いひきかせ、また語をついでいふ。

Only look up clear :

To alter favour ever is to fear :

Leave all the rest to me. (*Macbeth*, Act I, Sc. V)

(只晴々した顔をしていらつしやい。面色の變つてゐるのは、胸に怖れのある徴ですから。他の事は、万事わたしにお任せなさい。)

かくして、マクベスの城では、やがてダンカン王を迎へるけれども、マクベスの決意は動搖する。そして迷ひの隙間からは良心のかげがちらちらと明滅する。彼は考へる、彼自らは王の近親でもあり、臣下でもある。しかも王の信頼を得、新たな名譽さへ授かつてゐる。本来ならば、王をその殺害者より護る立場にある人間である。そのうへ、王は徳高く衆望をあつめてゐる。如何なる意味でも自分の行動を正當化することは出来ない。そこで彼は弑害の決意を醸した次第を、マクベス夫人にうち明ける。かねて、かかる大事決行に最大の障害となるその性格を熟知してゐた夫人は、言葉をつくして彼を激勵し、その氣になりさへすればその計畫と實行とが如何に容易であり、また、時、場所、ともに揃つて

如何に絶好の機會であるかについて、わが愛兒を諭すように説いて、とにかく、「あなたは男子ではないか」、自分は女ではある、それで……

I have given suck, and know

How tender 'tis to love the babe that milks me :

I would, while it was smiling in my face,

Have pluck'd my nipple from his boneless gums,

And dash'd the brains out, had I so sworn as you

Have done to this. (*Macbeth*, Act I, Sc. VII)

(わたしは乳汁を飲ませたことがあるから、赤兒の可愛さはよく知つてゐます。けれども、もしわたしが貴下がお誓いなすつたように、一旦斯うしようと誓つたなら、その赤兒がわたしの顔を見て、にこにこしてゐる最中にだつて、そのぶよ／＼した齒ぐきから無理やりに乳首を引つ奪つて、その腦髓を叩きつけて微塵にしてお見せします。)

といふ。これが、もし善事に對してこのやうに夫を愛情を以て激勵するものならば、洵に烈婦であり、貞婦であるといはなければならぬ。既に觸れたとほり、決して女らしさを失はないように描かれてはゐるが、一度決意すれば、平然として、如何なることをも決行し得るのである。敢て夫の手を待つまでもなく、わが手にかけても弑逆を敢てし得る女性である。事實、「寝顔がお父さんに似てさへゐなかつたら、先刻やッちまつただけだ」(第二幕第二場)といふことの出来る女性なのであつた。女のやさしさに、この烈しさを兼備してゐるところに、また却つて凄愴味を加へることになつてくる。そして存外この邊にも、シェイクスピアの婦人觀を垣間見る鍵がひそんでゐさうでもある。そこで、マクベスは、

Bring forth men-children only :

For thy undaunted mettle should compose

Nothing but males. .... (*Macbeth*, Act I, Sc. VII)

(男の兒ばかりお生みなさい、その不敵な精神ぢや男性以外をこしらへることは出来まい。)

と感嘆せざるを得なくなり、ついに、

I am settled, and bend up

Each corporal agent to this terrible feat.

Away, and mock the time with fairest show :

False face must hide what the false heart doth know.

(*Macbeth*, Act I, Sc. VII)

(ぢや、決心した。全力を引絞つて、この怖い仕事に取掛らう。さ、さ、あつちへ。何事もないやうな顔附をして、人目を欺かう。心に偽がある時は、面を偽りで包んでゐにやならん。)

と、いい切つて確約してしまふ。

### 三

ここを轉機として彼の心は大きな展開を見せてゐる。即ち情ある勇武の人物であつた彼は、惡と偽りにみちた姿となつて現はれてくる。しかし野心のために、王の弑逆を決意した彼の良心は、この時まで悉く眠つたわけではなかつた。そこで、今後は彼はつねにその良心を自分自身で蔽ひかくし、そして良心の苛責もさることながら、さらに惡事の發覺と地位の安固性に對する不安に襲はれてゐる。そしてこの不安除去のためにも層一層罪の深みに落ちてゆくのである。しかしとにかくいよいよ弑害を決意しても、その斷行に際しては尙懊惱苦悶。他方その豊富な想像力に煽られては短劍や滴る血潮を幻視したりさへしてゐる。いよく決行するや、彼の心には、

..... Sleep no more !

*Macbeth does murder sleep, ..... (Macbeth, Act, II, Sc. II)*

(もう眠れない、マクベスは眠りを殺す……)

と、呼號つてゐる聲が聞えるように思つた。彼の言葉にして人間の肺腑をえぐるもの少くはないが、これらは、最も凄愴深刻なものの一つであらう。つまりシェイクスピアの眠りとは、善と無邪氣との報酬であるからである。しかしながら、ダンカン王の死を悲しむ人々の前で、マクベスは臆面もなく言つてのけた。

Had I but died an hour before this chance,

I had lived a blessed time ; for, from this instant,

There's nothing serious in mortality : (*Macbeth*, Act II, Sc. II)

(この一時間前に死んでゐたなら、幸福な一生を送つたといへたものを。今から最早この生に、眞實、大切な物は何もなくなつてしまつた。)

内心の苦悶を別の言葉に假託したようにもとれるけれども、こゝでは前後の事情から察すれば、洵に白々しい空言にすぎない。盗人猛々しいと斷じなければならぬ。これより後は、良心は、曇りゆく夜空の星のやうに、次第にその影を潜めてゆく。そして發覺の不安、地位動搖の不安のため、一度血の味を知つた野獸のやうな殘忍性を發揮してゆく。そして例の妖巫どもが、マクベスの僚友バンコーに對しては、王者の祖となるとの豫言をしたことに不安を感じ、彼ら父子をも亡きものとしようとするが、しかし彼はもう以前のやうにマクベス夫人の助力を、「計畫の協腹を蹴立てる拍車」などを必要とはしなくなつてゐた。惡事を行ふときは、もう立派な惡魔に轉身してゐた。彼は自ら頼んだバンコーの刺客に對して自らの心情と愛情とを信ぜさせようとするが、彼自身は毫も自らの心情や愛情を信じてはゐなかつた。彼の良心はすでに麻痺あるひは假死の境に入り、自らの惡事、虚偽、殺人に對してさへ、自らの良心の作用を抑へることが出来るようになってゐた。しかし彼は自らの重ねゆく惡事によつて心の落付と安心とを得るのみか、惡事露見の恐怖のため事實は却つて反對に不安を倍加し、事態を複雑化してゆく。そして彼の

運命の暗さはいよいよその濃さを増してくる。そこで彼は夜毎に苦しんだ。彼の行つてゐる或は行はうとする一切の事が、悉く彼の惡の性情から發するものであり、彼の良心はもはやこれを如何ともすることが出来なくなつてゐた。自分の行爲に對しては無力であつた。しかしこの良心も自己の過去を振返るとき、反省するときには、どうも息を吹き返して頭を擡げるらしい。そこで彼は現實の生活を出來るだけ安樂にして、過去を振返ること、即ち良心が働くときをなくしようとなつた。しかしそれも無駄なことが多くなつた。そこで、

But let the frame of things disjoint, both the worlds suffer,

Ere we will eat our meal in fear and sleep

In the affliction of these terrible dreams

That shake us nightly : better be with the dead,

Whom we, to gain our peace, have sent to peace,

Than on the torture of the mind to lie

In restless ecstasy. .... (*Macbeth*, Act III, Sc. II)

(ああ、びくびくして三度の食事をしたり、毎晩いやな夢にうなされて眠るくらゐなら、万物の組織も秩序も打毀れて、王も地も滅茶苦茶になつてしまへ！心を拷問にかけられたやうに、苦しみ悶えてゐる位なら、この望みが遂げたいために大往生を遂げさせたその亡者と同じになつた方が優だ。)

と、苦悶してゐるけれども、しかしこれはあながちしも、良心だけの苦悶なのではない。其の意味での後悔や懺悔ではない。その根底には、不安、恐怖、焦慮、絶望感などの錯綜したものが横つてゐる。そしてこの恐怖や不安は彼をして今後益々向ふ見ずの猪突にかりたてるのである。そこで彼はこの苦悶をかゝす原因の一つである地位に對する不安を除くために、バンコー父子を暗殺させるが、父のみを殺して、子を逸してしまふので、彼の悩みは少しも小さくはならない。かくしてこの悩みは彼

に、大饗宴のさ中、衆人環視の中で、バンコーの幻影を見せるのである。しかし彼はもうたぢろがない。そして、

..... For mine own good,

All causes shall give way : I am in blood

stepp'd in so far that, should I wade no more,

Returning were as tedious as go o'er :

Strange things I have in hand, that will to hand ;

Which must be acted ere they may be scan'd.

(*Macbeth*, Act III, Sc. IV)

(自分の利益のためにはもう何もかも犠牲にするんだ。血の河の中へ、かう深く踏み込んだ以上、涉り果すより外にしようがない。今さら戻らうたつて、道程は同じように困難だ。變なものが、この頭の中に在る。今に手へ傳はつて來さうだ。そいつアすぐ實行せにやならん、とやかくと調べられたり何かせんうもじ。)

と、いつてゐるやうに、嘗つて意志が弱く、容易に行動性を見せなかつた彼は、もうがむしやらに衝動的に行動に移るやうになつた。そしてその行動によつて不安をば苦悶をば、意識のそとに追ひ出さうとした。かくて不安のままに被害妄想に怯え、粗暴になり、無暗に人を猜疑した。そして

..... My strange and self-abuse

Is the initiate fear that wants hard use :

We are yet but young in deed. (*Macbeth*, Act III, Sc. IV)

(妙な幻影を見たり何かするのは初心で臆病なからだ、鍛錬しなけりやならん。悪いことにかけてまだ幼稚なのだ。)

と、いふほどの惡度胸が出來てきたが、それでも自分の不安をしづめようとして、荒地に例の妖巫どもを訪れて、その豫言をきくことになるがその結果は次の條項であつた。即ち、マクベスは、マクダフに注意す

ること、ファイフの領主に注意すること。(二)婦人が生み落したものは、斷じてマクベスを害ふことは出来ないこと。(三)バーナムの森がダンシネの丘の上へ攻寄せて來ないうちは、マクベスは斷じていくさに負けることはないといふこと。これらの三つであつたが、彼は安心の上にもさらに安心をといふので、マクダフを亡きものになしようとしたが、その時マクダフは既に風を喰らつて逃亡してゐた。そこで残されたマクダフの妻子は、マクベスの刺客の手にかかつて、無慘な最後を遂げることになつた。

かくしてマクベスは今や夫人の示唆や援助または激勵なしに、一個の惡魔として無道振りを發揮することになつた。

(1) これらのことについては、L. B. Campbell: *Shakespeare's Tragic Slaves of Passion—Section III Mirrors of Passion*, Chap. XV *Macbeth: A Study in Fear* の中に述べられてゐる。

#### 四

話は少し前に溯るけれども、マクベス夫人はさきにダンカン王の弑逆をマクダフの口から聞いて、氣が遠くなつて倒れ、別室に連れ去られる。居合せた人々は、勿論己が居城での不祥事の責任感からのことと思ふのが、きはめて自然である。しかし氣丈な彼女のこの氣絶卒倒の眞偽についての解釋は、やがて彼女の性格理解と大きな關係を持つてくる。

あるシェイクスピア學者によれば、マクベス夫人は女ながらも實に氣丈な人間であつて、すべて覺悟の上のことであるから如何なる衝擊にも堪えうる女性である。しかし夫マクベスが無考へにも王の二人の従者をも殺害したことが告げられ、さらにマクダフがこれを非難するのを聞いたとき、これは豫期しなかつたこととて、流石の彼女も瞬間的に氣が轉倒したものである。これらの推測とそのまゝ一致しないまでも、とにかく、彼女の考へたこの弑逆の結果が、こゝで思はぬ障害に合ひはしない

かといふ不安の打撃と一應考へることが出來よう。

Who dares receive it other,

As we shall make our griefs and clamour roar

Upon his death?

(*Macbeth*, Act I, Sc. VII)

(さう思はなくつてさ、わたしたちはけたたましく聲をあげて、王の變死を歎いて、騒ぎたてますから。)

といつて、夫を説得してゐる節を考へると、この卒倒ははじめから彼女の目論見てゐた芝居と考へられないこともないが、それは少し穿ちすぎた議論である。といふわけは何しろマクベス夫人には意志とその實行の間には殆んど距離がないからである。「水で一寸洗ひさへすりや、爲した事ア消えッちまひますよ。」(第二幕第二場)と、いつて、手を染めた王の鮮血を洗ひおとせば、それで万事兎がつくと考へるほど、計畫性に欠けてゐるのである。

論者によつては、マクベス夫人をば恐るべき惡の權化であり、殘忍酷薄、情を解さない女と見るけれども、必ずしもさうと斷定はしにくい。第三幕第二場に於て、「望むものは手に入れても、満足がなければ、なんにも持たぬとみな同じ。」と獨白してゐるが、こゝでは鐵石の彼女の心にももう動搖が感じられる。この頃益々大膽不敵になり向ふ見すになつた夫マクベスに反して、夫人には何かしら一種の陰影が感ぜられる。そして夫人はこの頃、半ば打ち明けられたバンコー父子殺害の計畫の結果に希望をつないだものの如く思はれるけれども、これも失敗に終る。しかも人前では氣丈な彼女は些かの變化もその顔色には表はさない。一體彼女の勇敢さ、その猪突的行動性は、想像力の欠點に由來するものでもあつた。

..... : the sleeping and the dead

Are but as pictures : 'tis the eye of childhood

That fears a painted devil. .... (*Macbeth*, Act II, Sc. II)

(眠てるものや死んでる者は、畫像も同様です。畫にかいた鬼を怖がるのは子供です。)

といふ彼女は、この際でもまだマクベスの見る幻影を輕蔑しつつける。そして諸侯招待の饗宴の場(第三幕第四場)のマクベス夫人が夫への非難と諫めと激勵の低い力がこもつた囁きや言葉などが血をこぼらせるような凄味を以て、われわれに迫つてくる。しかし、これは彼女の強烈な意志力のすばらしい燃焼の最後の火花であり、絶頂でもあつて、これを轉機として、その後は漸次下降の線を辿つてゆく。さしも強力な意志力も、それを支持する體力の消耗とともに弱つてゆき、思はぬところに女らしさを表はしてくる。この宴席もしらけて客人らの退場した後は、彼女はこれまでのやうに言葉數があまり多くはない。ただ沈んだ言葉でマクベスの言葉に應ずるだけ。「あんたには、生に必要な、眠りといふ保養が不足してゐますのよ。」と、呟くだけである。そこには悲哀と女らしい情愛とが、しづかに漂うてゐる。この沈黙がちな場合は劇全體に見られるマクベス夫人の性格において最も和氣にみちた女らしい美しい特質がうかがはれる。そこで、繰返していふ、彼女に不足してゐるのは想像力と、さらに宗教心とであつた。實行性から、前者は、意志と行動を調節しなければならなかつたし、後者は、非望の意志を抑壓する面に作用するものであつた。マクベスの恐れる亡靈や短劍の幻影は彼女には何の意味をもつものではなく、これを怖れるものは、「怖れるにも事を欠いて、そんな質物に、冬の爐の傍で、女子供がお祖母さんの保證附で話す怪談」(第三幕第四場)におびえるものであつた。しかも傷いた彼女の良心から流れ出る悔恨は、神とは充分關係してゐなかつた。もし悔恨なるものが、本質的には宗教的なものであるとすれば、それは彼女の場合には悔恨といふ性質のものでもなかつた。單に過去に對する懸念であり、恐怖であつて、未來に對する恐怖ではない。つまり未來に對する發覺の恐怖ではあつても宗教的恐怖ではない。自分自身に對する

苦惱であつても、正義に對する恐れではないのである。かくして蔽ひにくすことも抹殺することも出来ない深刻なる過去とその恐怖による肉體的消耗は、ついに彼女を夢遊病に誘つた。蠟燭を片手にかかげながら、ダンカン王刺殺の日の思出のまに、手を染めた血潮を洗ふのである。一應良心の苛責の前に膝を屈したとも思へるが、必ずしもさうだとのみは斷じ切れない。はじめ王の刺殺に當つて「……仕掛けて仕遂げないと身の破滅になる」と、いつた彼女である。見方によつては、良心などはじめから棚に上げておいたともいへる。ただ重なる異常な出來事に身心は消耗するが、意力だけが依然として衰へず、夢になほ殺害の場面にゐて、やさしく夫を激勵しながら、自らはせつせとその血潮を洗い落さうとしてゐると見ることが出来る。かく考へれば、洵に壯んな意力である。がしかし、體力の消滅は意力の破綻であつた。そしてこのやうなみじめな病人とはなつたのである。目は見開いてゐるが、瞳孔は光に反應しない。手についた血痕を幻視し、その惡臭を幻嗅し、内を叩く音を幻聽する。さながら亡靈そのものである。或はそれ以上である。もしこれが、烈々たる野心に夫を示唆し、激勵し、やさしく叱咤した婦人のなれの果てかと思ふと、人間といふ生物がそゝろにあはれになつてくると同時に、まことに凄愴、鬼氣森然として人に迫るものがある。

醫師はマクベス夫人の夢中遊行を見て、大いに驚き、かねがね世上の噂を耳にしてゐたので、「この病氣はとて私の力には及ばない」(第五幕第一場)と嘆き、

..... : unnatural deeds

Do breed unnatural troubles : infected minds

To their deaf pillows will discharge their secrets :

More needs she the devine than the physician.

(*Macbeth*, Act V, Sc. I)

(常規を逸した悪行は、とかく常規を逸した惱亂を醸し易い。毒にかぶ

れた心は、その秘密の苦しみを耳のない枕にうち明ける。お妃には醫師よりも聖僧さんの方が必要です。」

と、逃げ、身邊には危険なものを置かないようにと注意する。この醫者のなした注意をきけば、夫人は良心の苦惱に堪えかねて、こうしたみじめな姿になつたように思はれるけれども、さうした單純な一つの原因にだけ歸してしまふのは、シェイクスピアの人間を扱ふ場合には、至極危険である。あくまでも、醫師がさう感じただけのことである。見方によつては異つた姿を見ることが出来るからであり、こゝにまた彼の藝術の秘密の一つが潜んでもゐるし、また彼の作品が永久に新しく、いつの時代の試問にも堪え、近代性を失はない所以なのである。シェイクスピアのやうな作家になると、ありふれた良心の苛責とその後悔などといふやうな尋常なものをば、たゞそれだけをとりあげて、テーマとはしないのである。

- (1) この點については、昔からいろいろの意見があり。例へばソマヴィルなどは、マクベス夫人の卒倒をば、その場をつくらふ體裁からきた假装のものとして斷つてゐる (cf. H. Somerville: *Madness in Shakespearean Tragedy*, chap. II, 'Macbeth: A Paranoia', p. 41)。こゝとこゝで、ソマヴィルなどは一般的には、夫人の失心は假装といはれてゐるが、實は眞實のものであると述べてゐる (cf. George Fletcher: *Character Studies in Macbeth*, 'Macbeth and Lady Macbeth, After the Murder of Duncan', pp. 30-31) またシェッキンガなどもこれと同じ結論を出してゐる (cf. Levin L. Schücking: *Character Problem in Shakespeare's Plays*, chap. V, pp. 227-229) が、その結論を導く假定は程度の差はあれ、またそれへに異つてゐる。
- (2) 例へば Edward Dowden などである。『(Cf. Edward Dowden: *Shakespeare: His Mind and art*, chap V)。
- (3) 例へば Mrs. Fameson などである。

## 五

さて、マクベスをとり捲く四圍の事情は日に日に悪化し、重大化してきた。夫人の病氣に加ふるに、ダンカン王の遺子に味方して、イギリス

軍の攻撃がはじまつたのである。そしてそれにはマクダフも参加してゐた。この頃になると、彼マクベスの言動は荒々しく粗暴となり、従者どもを罵倒し、自らに對しても皮肉な自嘲的な色調を帶び、場合によつて自暴自棄にさへなるのであつた。

..... Then fly, false thanes,

And mingle with the English epicures :

The mind I sway by and the heart I bear

Shall never sag with doubt nor shake with fear.

(*Macbeth*, Act V, Sc. III)

(だから、逃げる、二心の貴族めら、さうしてイギリスの柔弱どもと一しよになれ。國を御するこの精神、この勇氣は、疑惑で衰へたり、恐怖でぐらついたりはせんぞ。)とか、あるひはまた、

I'll fight till from my bones my flesh be hack'd.

(*Macbeth*, Act V, Sc. III)

(この肉が骨から削りとられるまで戦ふぞ。)

などと、いふだけあつて、彼は決してひるまない。その剛腹さには北歐神話の神々のある佛を宿してゐる。もう以前のやうな弱い性格を見せはしない。けれども、また他面、同じく第五幕第三場に於て、

..... : my way of life

Is fall'n into the sear, the yellow leaf ;

And that which should accompany old age,

As honour, love, obedience, troops of friends,

I must not look to have ; but in their stead,

Curses, not loud but deep, mouth-honour, breath,

Which poor heart would fain deny, and dare not.

(*Macbeth*, Act V, Sc. III)

(生きてゐても、行手はもはや黄葉だ、凋落の秋の暮だ。しかも老年に伴ふ苦の名譽や愛敬や柔順や信友の群は、到底得られさうな望はない、いやその代りに、聲は低いが根の深い呪咀や目先だけの尊敬や空世辭ばかりが附いて廻りをる。)

と告白してゐるとほり、決してダンカン王の弑逆やその他の悪行を忘れはしなかつたし、また忘れる筈もなかつた。が、良心の苛責は決して切實なものではなかつた。恰も第三者的な態度であつた。それだからこそ(そしてまたそこには發覺を恐れる氣持もあらうが、)

Cure her of that.

Canst thou not minister to a mind diseased,

Pluck from the memory a rooted sorrow,

Raze out the written troubles of the brain

And with some sweet oblivious antidote

Cleanse the staff'd bosom of that perilous stuff

Which weighs upon the heart? (*Macbeth*, Act. V, Sc. III)

(それを治してやつてくれ。汝は、病んでゐる心を介抱して、その記憶から根深い愁いを抜き去り、脳髓に記録してゐる苦痛を擦り消し、何か快い忘れ薬で以て、心が、一ぱい壓へつけられて、今にも破裂しようになつてゐるのを、晴々と透つてしまふやうにしてやることは出来んか?)

と、夫人の病氣の處理を醫師に依頼してゐるのである。これらの言葉は痛切骨をえぐる懺悔的告白的な氣持とはかなり縁の遠いものである。そしてまたさうした病氣處理の希望は、夫人に對してばかりではなく、自分に對する希望なのでもあつたらう。しかし、この希望は希望として、彼は他面益々剛腹になり、ふてぶてしくなつてゆく。そして

I have almost forgot the taste of fears :

The time has been, my senses would have cool'd

To hear a night-shriek ; and my fell of hair

Would at a dismal treatise rouse and stir

As life were in't : I have supp'd full with horrors ;

Diriness, familiar to my slaughterous thoughts,

Cannot once start me. (*Macbeth*, Act V, Sc. V)

(恐しいといふ味は、殆んど忘れた。夜の叫び聲を聞いて冷水を浴びるやうに感じた時代もあつた。凄い話を聞くと、頭髮が逆立つて、生きてゐるやうに、動いたこともあつた。随分怖しい目にも逢つて見た。今ぢやア人殺しにも慣れてしまつたので、どんな怖ろしいことも、もう俺を脅すには足らん。)

と、マクベス夫人の死をきいたときでもへも、次の如くいふ。

She should have died hereafter ;

There would have been a time for such a word.

To-morrow, and to-morrow, and to-morrow,

Creeps in this petty pace from day to day

To the last syllable of recorded time,

And all our yesterdays have lighted fools

The way to dusty death. Out, out, brief candle !

Life's but a walking shadow, a poor player

That struts and frets his hour upon the stage

And then is heard no more : it is a tale

Told by an idiot, full of sound and fury,

Signifying nothing. (*Macbeth*, Act V, Sc. V)

(やがて死なねばならなかつたのだ。いつかは一度さういふ知らせを聞くべきであつた。明日が來たり、明日が去り、又來り、又去つて、『時』は忍び足り、小刻みに、記録に残る最後の一分まで経過してし

まふ。すべて明日といふ日は、阿呆どもが死んで土になりゆく道を照らしたのだ。……消えろ消えろ、束の間の燭火！ 人生は歩いてゐる影たるに過ぎん、只一時、舞台の上で、ぎつくりばつたりをやつて、やがてもう噂もされなくなる惨めな俳優だ、ばかが話す話だ。騒ぎも意気込みもえらいが、たわいもないものだ……)

と。愁歎の場面を見せられるよりは、却つて深刻な悲劇的情緒を誘はれないことはないけれども、とにかく撫然として述懐するだけである。かくて、マクベス夫人は鬼火のやうに不氣味に、しかし佻しく消えてゆく。熾んであつた彼女の出だしに比しては一入よい對比を見せながら、しづかに消えていつた。

やがて、マクベスは、バーナムの森がダンシネーに向つて移動するといふ報をうけとる。敵がその兵力をかくすために、森の樹を切りとつて之をかざして進軍するとは、思ひもよらぬことであつた。そこで當然彼は自らの運命について不安の疑惑を濃くする。周囲はもう既に敵に圍まれてゐる。彼は最後の戦のために、甲冑に身を固めて獅子奮迅の勇を振ふ。敵將の一人少シワードは、彼の劍に倒される。やがて彼は例のマクダフとめぐり會つたとき、そのあげた名乗りによつて、マクダフが母の腹を切つて、生れない先に出て來た人間であることを知るのである。

Accused be that tongue that tells me so,

For it hath cōw'd my better part of man!

And be these juggling fiends no more believed,

That palter with us in a double sense;

That keep the word of promise to our ear,

And break it to our hope. I'll not fight with thee.

(Macbeth, Act V, Sc. VIII)

(おのれ、憎や〜、その舌の根！ その一言が俺の勇氣を挫きをつたわい！ あの嘘つきの悪魔どもめ、兩義の語で人を欺き、耳へ約束を

守るらしく聞かせておいて、肝腎の望みを失はせをる悪魔どもめ、もう信ずるこつちやアないぞ……(マクダフに) 汝と戦ふのはもう止した。)

「汝と戦ふのはもう止した。」かういつたときの言葉こそ、ダンカン王弑害以後久しく見られなかつたマクベスの以前の自然の姿が現はれてゐる。嘗つて勇將の名をほしいままにしたマクベスが武技に自信のない筈はないのに、「汝と戦ふのはもう止めた」といつた。この言葉には、彼の武術の巧拙などの問題よりもまづ彼の人間としての弱さの迸出が見られるのである。マクベスは野心のために良心を抑壓し妖巫らの豫言する運命をかへようとした。いいかへれば、それは彼自身の運命ではなく、野心の、不逞なる野心そのものの運命であり、野心が生み出す不安の運命でもあつた。この點では、ギリシャ悲劇に見られる運命とは本質的に異質のものであつた。そしてこの運命への挑戦と奮戦の中に、眞の自己の姿を埋めつくさうと努力し、そして自ら努めて自分の本然の姿を見まいとした。しかしながら、今こゝに「汝と戦ふのはもう止めた」といつたときに、密雲が破れて天の一角に青空が現れたやうに、彼の本來の性質がゆくりなくもその片鱗を見せたのであつた。野心の運命がかもす不安の波は、彼の心に大きく動いて、外的には所謂妖巫の豫言の相づく實體化即ちコーダーの領主、王位、バーナムの森の移動などつきつきに實現してゆくので、強引に偽りつづけてきた彼の自己の本然の姿が、突差の間に極めて自然の形で現はれたのである。三人の妖巫によつて暗示された彼の野心への誘惑、そしてマクベス夫人に唆かされてダンカン王を弑害し、良心の苦悶と眞相暴露の不安にさいなまれ、自己の地位の不安定におびえては、さらにバンコーを暗殺したことも、またバンローの亡靈の幻影を自分の坐席に見るのも、すべてこのマクダフとの戦において彼が叫んだ「汝と戦ふのはもう止めた」といふ言葉に表はれた彼の弱さでもあつて、これは近代的な心には程度の差こそあれ、一應はそのかげ

を見せるものである。しかしそれは瞬間であつた。彼は忽ち立ち直つて、

I will not yield,

To kiss the ground before young Malcolm's feet,

And to be baited with the rabble's curse.

Though Birnam wood be come to Dunsinane,

And thou opposed, being of no woman born,

Yet I will try the last. Before my body

I throw my warlike shield. Lay on, Macduff,

And damn'd be him that first cries 'Hold, enough!'

(*Macbeth*, Act. V, Sc. VIII)

(降参なんかして、あの青二才のマルコムの下で、地面を嘗めたり、愚民どもに呪い辱められるやうな目に逢ふものかい。たとひバーナムの森がダンシネーンへやつて来ようと、女に生み落されない汝に立ち向はうと、最後の運試しをしてくれる。この通り、楯は抛けすてる。さ、打つて来い。マクダフ、戦半ばに『待て!』と呼びかけたものは地獄へ落ちるぞ。)

と、豪語してゐる。北歐の武人らしい剛腹さと兇暴さとは、いまや全く習性となつてゐた。しかも彼は武技については充分の自信があつた。そこで彼はここに彼の最後の運命をかけたが、その結果はマクダフの矛先に生首としてかけられ、ハムレットのいふやうに、「罪の價は死」となつて、この悲劇は終るのである。

(1) 例へば北歐神話中の禍の神 Loki の如きもので、古代ゲルマン系の文學作品中にはよくかうした剛腹な人物が登場する。*Nibelung Lied* の Hagen の如きも、さうであり、*Beowulf* 中のある人物にもかうした倅が見られる。

## 六

かくして、この劇において、マクベスとその夫人の性格は、對稱的な展開を見せてゐる。はじめマクベスは、良心的で意志弱く、とかく逡巡實行力に乏しく、優柔不斷を咎められるやうな不徹底な性情であつたのに、夫人は反對にこの責へ切らない夫を只管激勵し野心遂行の行動へと追ひ込んでゐるが、劇の中ほどから、今度は二人の行動は逆轉する。マクベスは弱い性格から強暴なそれにうつつて、殆んど思慮をも用ゐずに衝動的な行動にうつるほどになり、夫人が強烈な性格から、意力とはともかくとして、體力は慥かに弱つていつて、最後には夢に尙弒逆の現場にゐて、血潮を幻視してせつせとこれを洗ひ落してゐるといふあはれな姿になつてしまふ。これは、まことに興味深い對稱であつて、ともに現實に見られるある人間たちの姿であり、また同時に、この劇に一種の凄さと深さとを與へてゐるのである。而してこの二人はあるときは良心の苛責に苦しんでゐることも明瞭ではあるが、決してそれのみといふやうな單純なものではない。眞相發覺の不安にもおのいてゐるのである。かういふ點でも、マクベス夫妻は決して單純な心のうごきを示してはゐない。まことに複雑なのである。既に觸れたやうに、シェイクスピアのやうな作家になると、單なる良心の苦悶などといふやうな尋常な割切られたテーマを、しかもそれ一つに限るといふやうな割り切れる形では用ゐないのもあらう。ホレーショーに向つてハムレットをして、

And therefore as a stranger give it welcome.

There are more things in heaven and earth, Horatio,

Than are dreamt of in your philosophy. (*Hamlet*, Act I, Sc. V)

(そこで、ただわからないものとして、うけとつておくんです。なあ、ホレーショー、この天地の間には、貴君の哲學などでは思ひもよらぬことがあるんです。)

と、いはしめた彼は、人間の心の世界の廣さ、深さ、複雑さをそのままうけいれようとしたのである。

ドストエフスキー (F. M. Dostoevsky) の「罪と罰」(Crime and Punishment) のラスコルニコフが、自らの聰明を自負して金貨の老婆を殺害し、のち思ひがけない發覺の不安に絶えずおびやかされるのが、近代的な描寫として推稱されるけれども、何もドストエフスキーを待つまでもなく、既にこの劇の中に見られる要素なのである。かくしてこの劇は、さきに述べたとほり、單に「良心の悲劇」であるとか、「野心の悲劇」であるとか、また良心と野心との葛藤の繪圖であるとか、あるひはまた「マクベスは迷信の餌食である」とか、世嗣ないものの悲劇であるとかいふやうに、ただ一つの概念で、この内容全體を包まふとするのは、あながち出來ないことでもないけれども、無理を敢てする結果になるのである。ここの主人公たちの性格には、まことに微妙にして、象徴的なものが見られ、照明のあて方によつて、いろ／＼の面を見せることになり、そしていろ／＼の意味で、そこには極めて近代的なもの、いつの時代でも決して、解決されて古くはなつてしまはないものを包含してゐるのである。

(附言) なほ本稿中のシェイクスピアの作品の邦譯は止むを得ない場合のほかは、汎く流布されてゐるのを理由として、大體坪内逍遙のものを借用したことをお断りする